

日文研と私の研究歴

ロー・ダニエル

わが心の御陵大枝山

ゴリョ・オエヤマ？私はアメリカの大学院生だった一九八五年、日本語を勉強し始めた。語学学習にずいぶん長い間苦勞し、日本で何年も生活した後、二〇一年日文研に到着した時には日本語能力に密かに誇りを持っていた。ゴリョ・オエヤマ、日文研が位置する神秘的で発音しづらい村の名前は京都生活に対する期待をふくらまし、それは裏切られなかった。

ここで東日本大震災について述べなくてはならない。この大惨事について聞いたのはソウルにいた時だった。友人たちは日本に行くのを心配したが、私はためらうことなくはねのけた。京都は東北から遠いし、そのような天災事変を経験することは、私の日本「研究歴」にとって必須だろうと思った。そして二〇一一年のエイプリル・フールの日に日文研に到着した。第一印象は、静けさと美しい風景に包まれた遠い修道院だった。

一年間、日文研ハウスに妻と暮らした。はっきりいうが、その年は私の人生で最も思い出深い一年だった。日文研を取り囲む美しい風景と音は今でも私を離れない。日文研は、京都の中心からバスで一時間しかかからない。だが、ひとたび御陵大枝山の丘を登り始めると、別世界に入っていくのを感じる。日本文化研究において傑出した研究所である日文研は、丘と森の合間に引っ込んでいるため、ユニークな日本の美について新鮮な考えをめぐらすことになる。

国際的評判の割には実際には大きくないが、日文研は魅惑的でそそられる場所をいくつも持っている。まずきつぱりいえるのが図書館で、日文研の王冠の宝石であることは間違いない。ちょっと素朴な扉をあけると何段にも積みあがった木製の筒のように空間が広がる。濃いページュの筒は本棚が何段にも重なっていて、からだをぐるりと回して見上げるだけで見渡せる。そうすると、この場所が文化や文明についての研究に没入すべき場所にいると感じざるを得ない。

それと同じぐらい驚くのは日文研で一緒に暮らす人々の国籍が非常に多彩であることだ。周囲の自然は昔話を喚起するかもしれないが、所内で起きていることは紛れもなくグローバルさだ。教員、スタッフ、客員教員、大学院生がみな集まって多民族的なコミュニティを作っている。同じように日文研の屋根の下で進められている研究のテーマや分野も多岐にわたっていることも重要だ。今日は妖怪の専門家と話したと思ったら翌日は最新の博物館ソフトウェアについて語るができる。

私の研究歴の転換点

私はマサチューセッツ工科大学で「日本専門家」として訓練を受けた。アメリカの一流大学院では地域の専門家に対して、数年間専門の国で過ごしながら言語を学び論文調査を行うことを要求する。その目的のために一九八九年、私は初めて日本に足を踏み入れた。その入国には忘れがたい思い出がある。昭和時代にマサチューセッツ州ケンブリッジで航空券を買ったのだが、成田に到着した時には平成になっていたというのである。そこで私は「平成ガイコクジ」&nameと名乗る。私は祖国と複雑な歴史を持つ国を勉強しにやってきたことも言っておこう。そ

れ以来、他の国々でどれだけすごそうとも日本が心から離れたことはない。日文研で一年をすごすまで、日本と東京は私にとって同意語のようなものだったが、京都で過ごし関西を歩くことで、日本歴にバランスが生れ全体を見渡せるようになったと感じ始めた。MITの留学時代には「ボストン人」がアメリカの精神世界の頂点に立つ「丘の上の街」で暮らすことを誇りに思っているのを知って驚かされたが、京都市も自分の街が伝説の多い山々に囲まれた「心のふるさと」であることに誇りを持っているのを感じて感動した。

私は著名な政治学者である戸部良一先生に招かれて客員研究員となった。彼の親切な指導を一年間受けたことは、研究歴の重要な転換点となった。日文研に到着した時には既に祖国の外で二八年すごしていた。成人期の仕上げにかかろうという五七歳になろうとし、三〇年間のノマドのような生活を集約するような研究計画に取り組まなくてはならないと決心していた。

日文研で読書し議論し、情報に富んだ非常に多くの集まりに参加し、「地政心理」(政治地理学的心性)という概念を作り出していた。この概念により、社会と文化の間の関係を地政学的な条件によって形成された「集団的心性」によって分析し解釈しようと思った。日文研における研究は成功し、今ではその成果が生み出されつつある。たとえば藤原書店から『地政心理で語る半島と列島』と題された著作が近刊予定である。私の研究計画はさらにこの分野では最初の(とあえて言うが)研究会社を作りだすに至っている。最近ソウルで設立したアジア・リスク・モニター社は、朝鮮半島と周辺諸国に関する地政的なリスク評価を専門とする。

人はいつも他人の言ったことを繰り返す。「ただのランチはない」と。それは本当ではない。私は日文研で最も暗い片隅に作られたレストランの豪華な一室で、毎月開かれた無料の所長ランチを楽しんだ。レストランの名前が「赤おに」であることも、忘れられない。コモンルーム

で飲める香り高いコーヒーも懐かしい。妻と私は今も御陵大枝山時代を楽しく思い出し、ぞつとし、ぞくつとした場面(?)について話す。アパートのベランダからバナナを集める猿を見、珍しい野鳥が庭に飛び、ホラー映画を撮影しているかのような近くの暗い竹林を散策したことを。朝起きると桂坂小学校へ行く子どもたちがしゃべる声がまるで歌のように聞こえたことをぼんやり思い出す。そこで日文研の客員研究員として「授業」をしたのは楽しかった。

(アジア・リスク・モニター社代表取締役)

原文：英語

翻訳：細川周平 (国際日本文化研究センター教授)